

マシュー・アーノルドの宗教論

— 『聖パウロとプロテスタンティズム』について —

道家弘一郎

Matthew Arnold's Idea of Religion—*St. Paul and Protestantism*—

In *St. Paul and Protestantism*, the first of a series of four religious works by Matthew Arnold in his last period of writing, he argues that St. Paul has been misunderstood by Calvinistic Protestantism. Puritans believed the focus of Paul's faith was the sacrificial atonement of Christ on the Cross, His righteousness imputed to the believers, and His bodily resurrection after physical death, the guarantee of the believers' resurrection in a future world. But Arnold thinks Paul's idea is completely different from that of the Puritans, and that his originality lies in his effort to find a moral side and significance in the religious life, rather than basing it on miraculous events.

Paul's thought is well expressed in the phrase: "to die with Christ to the law of the flesh, to live with Christ to the law of the mind." In other words, "death is living after the flesh, obedience to sin; life is mortifying by the spirit the deeds of the flesh, obedience to righteousness." Therefore resurrection is for Paul the rising, "within the sphere of our visible earthly existence," from death to life in this sense, that is to say, resurrection *now* and resurrection to *righteousness*. According to Arnold, Paul knows nothing of a sacrificial atonement; what Paul knows of is a reconciling sacrifice.

"Substitution," one of the most important terms in Christian thought, means for Puritans that Christ died *instead of* man; but it means for Paul that Christ becomes the *representative* example of man's way of life and death.

Arnold says that Paul "spiritualised," as well as "Orientalised" or "Hebraised," what he had in mind. It can be said that Paul emphasized the spiritual and universal meaning of what he could not help thinking and expressing in his own Oriental and Hebraic way of thought and expression.

Arnold concludes the book with a heartfelt panegyric on St. Paul, which demonstrates his poet sensibility.

The demythologizing tendency in contemporary Japanese theology seems to agree with and illustrate Arnold's idea of religion.

アーノルドは詩を書き、批評を書き、社会評論を書き、宗教論を書いた、しかもこの順序で。この多産で多方面な著作活動の最後に浩瀚な宗教論が四冊もあることはあまり知られていない。そのシリーズ第一作が『聖パウロとプロテスタンティズム』(二八七〇)である。この表題は読者の意表をつくのではあるまいか。アーノルドの散文作品といえど、現代において必要なのはむしろヘレニズムの方であり、ヘブライズムにはそれをチェックする補完機能しか認めていない。それなのに、『聖パウロとプロテスタンティズム』という表題からはあたかもその正反対の主張であるような印象を受ける。なにしろプロテスタンティズムはルターによるパウロの発見、とりわけロマ書とガラテヤ書の発見に始まるというのが定説であり、パウロはいわばプロテスタンティズムの開祖である。それをそのまま表題にしたような部厚いこの書物は、一体何を説くのであろうか。

アーノルドは読者のそのような疑問を予想し先回りして、第一ページを、かのフランスの宗教史家ルナンの要約から始める。ルナンは近代プロテスタンティズムに対する嫌悪から、ルターによってプロテスタンティズムの開祖に祭り上げられた「パウロも今やその支配の終りに近づきつつある」という。アーノルドはこれを逆手にとって切り返す。聖パウロをさんざん利用し悪用したプロテスタンティズムは確かに終りに近づきつつある。その組織には死の指が触れ、その教説は意味も力もなくなった。アーノルドも近代プロテスタンティズム、とりわけピューリタニズムに対する嫌悪はルナンと共有している。しかし、真の聖パウロの支配はこれから始まる。ピューリタニズムの誤解から釈き放たれたパウロの思想は、人間性そのものの最も深く最も永続的な多くの事実と響き合うことによって、人間性に対する思想が発展してゆく未来においてこそ、ますます大きな影響力をかつてないほど発揮することになるだろう、と

いうのである。(5)注

では、プロテスタントイデオロギズムによる誤解とは何か。それはパウロの説く予定や義認を自己流に解釈してしまったことである。その原因はビュリタンが過度のヘブライズムに陥り、広い教養を欠き、視野を狭めた結果、聖書をさへ理解しえず、聖書の言葉や観念にその著者本人のものではない解釈を付与したからである。特にパウロの「復活」の教義にこれがおこった。聖パウロと聖書を、かかる曲解から救い出さなければならぬ、という。(7)

プロテスタントたちは、彼らがその教義の中心にすえるイエスの十字架による「贖罪」の教義もまたパウロに由来するものだ、と説く。だが、そこにも齟齬がありはしないか。アーノルドがそれを見きわめる決め手として持ち出す尺度は、いかにも十九世紀の思想家らしく「科学」である。宗教家に永続的な価値と活力を与えるものは、結局、その教説の科学的価値、すなわち事実と照応しているか否かである。アーノルドはまた事実を経験ともいう、われわれの経験に照らし合わせて立証の要求に応えられるものでなければならぬ、と。(8-9)

アーノルドがこの書物で扱う話題は実に多岐にわたる。次のページでは科学と宗教の違いが論じられ、科学の立場から、神は「それによって全てのものがその存在のうちなる法則を実現しようとする、方向性をもった流れ」(stream of tendency by which all things seek to fulfil the law of their being) と定義される。しかしこのような抽象的な神観にあきたりない人々は、「一種の拡大された、非自然的な人間」(a sort of magnified and non-natural man) の観念に達する。(10)そして話題はカルヴィニズムに移ってゆく。それぞれの話題はそれだけで独立の小論文に価する。いずれも説得力のある鋭い議論が展開される。しかし、それをそのまま提示する紙幅はなく、かつ、かえって煩雑になる。

そこで私はもっぱら二点に絞って論じたい。「贖罪」と「復活」である。キリスト教を他の宗教から区別するもの

は、この二つ、しかもこの二つだけである。これがなければイエスは単に優れた人物、卓越した宗教家というにすぎない。復活は、科学が最も蹟くところである。アーノルドの論理にしたがい、まず復活をとりあげ、つぎに贖罪に移りたい。

I

アーノルドは、パウロが意味するキリスト者の生活とは「キリストとともに肉の法則に死に、キリストとともに魂の法則に生きること」であるとし、これを *necessis* (死) の教義と名付けた。そしてこれがパウロの中心的教義であり、これこそがパウロの深刻さと獨創性を形作っている、という。(47) これはロマ書六章一―八章の要約である。ロマ書にもいろいろな箇所があるが、アーノルドは六章と八章(一―28節)を第一義的に重要な箇所と呼んでいる。(57) 「彼はもう一箇所ピリピ書三章をあげ、「この三つの章があれば、たとえパウロの他のすべての文書が消失しても、パウロの全神学が再構成される」(62) といっている。」

パウロはもちろんユダヤ教の神学の訓練は受けたけれど、彼がイエスに到った途は、神学研究を通してではなくて個人的経験を通してであった。コロサイ書(一15―17)の形而上的・神学的なキリスト論は、パウロにとっては第二義的なものであって、彼の本来の思想でもなく、まして基礎でもない。その点でヨハネ伝の著者とは全く違う。パウロの出発点は「義」「正しい生き方」であり、イエスへの関心もロゴスとしてのイエスではなく、メシア(救い主)としてのイエスであった。(41) やがて次作『文学と教義』(二八七三)のなかには、宗教の目的は行為であり、人生の四分の三は行為だ、という有名な言葉がみられる。(176)

パウロ書簡にしばしばあらわれる徳目の列挙は、「心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知る」(ロマ書一二) ために必要であったからだ、という。(25) ところで、このような全き善を、いとも易々と実現した人物がパウロの前に実在したのである。彼は、「一時的な見せかけの秩序よりも、真実の永遠の秩序を求めた。彼の外に障害は多くあったが、彼の内に障害は皆無であった。彼は神の霊に導かれ、罪に死に、神に生きた。この世においては、十字架の残酷な肉体の死に至るまでも、神に従いつづけた。神の霊に導かれている者はすべて神の子である、とパウロはいう。われわれのように神に生きることこんなに弱々しく、神に従うことこんなに不完全な人間にさえ、これが当てはまるならば、完璧に神に生き、変ることなき従順を全うした彼は、何層倍も唯一独自の「神の子」であることか。」(40) パウロにとつては、キリストの全く罪のない生き方が、彼が「神の子」であることを証明したのである。

後のピューリタン神学は、パウロ書簡からパウロ神学の三本柱を編み出した。召命と義認と聖化である。アーノルドは、後年この三つの概念で表現されたパウロの真意はむしろ「キリストと共に死ぬこと」「死者から復活すること」「キリストのなかに成長すること」であったと言いかえる。そして、こういうふうには並べると「死者からの復活」の意味が明瞭になる。

一般にキリストの復活とは、十字架の上における肉体の死の後、彼の肉体が復活することであり、信者の復活も来世において肉体的に復活することである、と考えられている。この肉体の奇跡がパウロ思想の中心的主題であり、パウロ神学の基礎と見なされている。なるほどパウロの初期の神学、とくにテサロニケ書簡やコリント書簡においては、いや彼の生涯の最後まで、ロマ書やピリピ書執筆の後も、パウロは奇跡的な肉体の復活を信じていたと思われる。この側面が人の耳目を引くあまり、現行英訳聖書の本文を変えてしまうような逸脱を生じた。パウロのギリシア語原文

ではただ「キリストは死んで生きた」(i. e. Christ died, and lived) とあるだけなのに、欽定訳では「キリストは死んで立ちて、よみがえった」(Christ both died, and rose, and revived) (ローザ一四六)と訳された。(50—51)

しかしパウロの心のなかで最も重要な地位を占めるものは、こういう奇跡的な肉体の復活ではない。この側面の復活は、パウロが発展させようとしている考えと一致しない。アーノルドは、パウロにとって生とは何であったか、死とは何であったか、と問う、「死とは、彼にとつて、肉に従って生き、罪に従うことであり、生とは、靈によつて肉の行ないを死なせ、義に従うことである。だから復活とは、この見える地上の生活において、このような意味の死から、このような意味の生へと立ち上がることである。パウロにとつて、眞の生は、律法の外的な「為すべし」「為すべからず」の支配からわれわれを解放する神秘的な死から始まる。だから、イエス・キリストが喜んで神の意志を行なった瞬間から、彼は死んだのである。パウロの主眼点は、イエス・キリストはその地上の生活において靈の法則に従い、神に果実をもたらしたことで、信者もその地上の生活において同じことをすべきこと、であった。キリストが「罪に死んだ」こと、「自己を喜ばせなかった」こと、したがって地上の全生涯を通じて、立ちて神に生きたこと、これがパウロの全心を占めていることである。パウロが自己の本質的な思考の方向をたどりながら信者の心を向けさせたいと思つた復活は、死後の肉体的な復活ではない。パウロが、自分自身のため、また他人のために追い求めた復活は、「今」の復活であり、「義」への復活であつた。(52)

「しかしイエス・キリストが神に従い、自己を喜ばせなかったことは、彼の十字架上の死において頂点に達した。じつさい、イエス・キリストは、その全生涯にわたつて、自己を喜ばせることはなく、罪に死んだ。(53) クリスチャンは、キリストのこの死において苦しみを分かちあい、その死のさまと一致しなければならぬ。

生においても死におけると事柄は同じである。「われわれがキリストの靈をもつならば、われわれは、キリストが

生きたように、靈によって生き、「キリストの靈に仕え」(ピリヒ三三)、永遠の秩序に従うのだ。神の靈とキリストの靈は同じもので、——一つの永遠の道德的秩序だ。もしわれわれが神の靈によって導かれるならば、われわれは神の子となり、キリストとともに神の子の遺産——永遠の命と至福と栄光を分かち合う。……われわれがキリストと一体化することを通してキリストの義を手に入れるとき、そのとき、われわれにとって永遠の命が始まるのだ——持続的な上昇的な命が。われわれが義の僕しもべとなり、永遠の秩序の器となればなるほど、ますますこの永遠の秩序そのものに組み入れられて、この世においてさえキリストと同じように、「天上の座につく」(エペソ二六)のである。〔53—54〕

「パウロがロマ書で述べる復活の真の意味は、この可視的な地上の生において、盲目的利己的な衝動に従う死から、永遠の道德的秩序に従う生へと立ち上がることである、——まずキリストの場合には、われわれが跡を追うべき模範として、次いで信者の場合には、自己をキリストと一体化させることを通してキリストの模範に従うためである。」(56)

そして次の引用が、アーノルドの「復活」についての結論といえるであろう。

「パウロの驚くべき偉大さは、彼の生きた時代・場所・出自にもかかわらず、「復活の」精神的意味を、しっかりと揺るぎなく、晩年に至るまでますます揺るぎなく、把握していたことである。彼を独創的で、彼自身たらしめているものは、彼の同時代者や近代の通俗的宗教と共通に持っている部分ではなくて、彼がみずから発展させている部分である。そして彼がみずから発展させているこの部分こそ、まさに彼の宗教をして神秘的呪術 (theurgy) ではなく神学 (theology) たらしめ、根底において非科学的ではなく科学的構造を持たしめるものである。「死んで生まれよ！」とゲーテという——これは確かにパウロの死生観がもつ心理的・科学的深みの、疑うべくもない証言である。——

「死んで生まれよー！これが実現されないかぎり、おまえは暗い地上の悩める客人にすぎない。」(55—56)

十九世紀半ばのアーノルドが復活を如何に考えたかは、以上の彼の文章の摘記によってほぼ推測されるであろう。これはやがて現われる非神話化 (demythologizing) の神学を予想させるが、アーノルドはこれを spiritualizing と呼んだ。(42—43)

II

では次に、「贖罪」は、どういふふうにかえられたであらうか。

ピューリタニズムの教義によれば、キリストが神との契約にしたがって、われわれの罪を担い、われわれの代りに死ぬことによって神の義が満たされれば、神は怒りをやわらげ、自由にその恵みをあらわし、もしわれわれがこうしてなされる贖いを心から信じ同意するならば、キリストの義は人間のものと見なされ、人間は義認され聖化される。

この転嫁「帰負ともいふ」された義 (imputed righteousness) の教義は、予定説と並んでプロテスタント教会が聖パウロに由来すると称する教義である。(62)

だが、この周知の教義がパウロのものではない、とアーノルドはいう。聖パウロの本質的な思想のなかには、身代りも、宥めも、他人の功德の転嫁も、全く存在しない。キリストが犠牲となったのは、贖罪のためではなく和解のためである。パウロにとって真の substitution とは、神の傷つけられた義に対する十字架上のいけにえとしてイエス・キリストが人間の身代りになることではなく、キリストが人間の代表となることであり、それにあやかって、信

者がそれぞれ自らの肉体において、イエス・キリストが罪に死んだ行爲を繰返すことである。十字架は贖罪をもたらすものではなく、悔改めへ導くものなのである。つまり、人間の生活態度の百八十度の転換である。キリストの全生涯が十字架上の死と復活であったように、われわれの全生涯も十字架にかかって死んで復活することではなければならない。これがパウロの中心的な教義である。(62-63)

ピューリタンの贖罪観は科学が拒否するばかりではない。たしかにパウロの育った民族・時代・教育のなかにはそれを産み出す要素があったとはいえ、パウロの深い宗教的感覚によっても拒否される。こういう贖罪観がパウロの書簡にあらわれることはない。唯一の例外があるとすればヘブル書であるが、これはアポロが書いたもので(ルターの推理による)、パウロのものではない。アポロはユダヤ的な犠牲観とイエスの犠牲におけるその類比にすっかり心を奪われていたが、パウロはそれを退け、よりよいものに代えることができたのである。(65)

そこでアーノルドはユダヤの犠牲観を検討し、犠牲には三つの考え方があつた、という。第一は、有力者に何か貴重なものを捧げることによって、彼の好意を得るか、怒りを買うとすること。第二は、本来貴重なものを手離すこと。第三は、罪を犯したことがらにおいて苦しむという形で罪を償うことである。

第一の考え方は迷信的であつて、人類の無知な、恐怖にかられる幼年期に属するものであるが、ピューリタンの義認論の主要素である。

第二の考え方は自から明らかであつて、パウロ的義認論の主要素である。イエスは、人間一般にとって最も貴重なもの、すなわち自己自身と自己本位な考え方を棄てたのである。彼は自己を喜ばせることをせず、神の心に従い、肉に宿る罪と掟に死に、十字架上でそのような死を完成した。これがパウロの考えるイエスの犠牲の本質である。

第三の考え方は取り違えられやすいが、深い真理を含んでいる。パウロの義認論にも多分に含まれている。「罪か

らのがれた」と思う人は、「肉において苦しま」なければならぬのである（Iペテロ四一）。「血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」のだ。（ブル九22）罪の償いの觀念の根底にあるものは、苦い経験である。われわれの性質も能力も、悪の習慣、つまり盲目的に利己的な衝動にしたがう習慣に、完全に冒されているから、善をしたいという思いが心のなかにおこっても、利己的衝動を抑えて善をなすには途轍もない努力を必要とし、直面する緊急の事態に応じられないのだ。こういう咄嗟の行為の困難さばかりか、あらゆる過去の抵抗がある。活力ある行動をおこすにはしばしば火や剣の迫害さえ必要なことがあるが、もし墮落した過去「『原罪』がなければ、われわれの道徳的機能に本来具わる健康的な活力から直ぐさま活動できたことであろう。これがわれわれが個人的に感ずる、罪の償いの必要性の眞の根拠であり、また、こうして人は罪の償いをするのである。（66）

だが、人間の理想である義人の場合はそうではない。彼には固着した悪の習癖も、邪しきな性質もない。能力は衰えず、抵抗する過去もない。精神的機能の壊疽もない。迫害の必要もない。彼はたやすく、かつ必然的に永遠の秩序にしたがう。ここに幸福がある。では、義人はどんな罪を償うのか。「われわれの罪だ。」人間の習癖となつた不正、頑なに無造作に道徳律を破ることなどによって、善の尺度は傷つけられ低下させられてしまったから、この尺度を純粹に無傷のまま保つためには、義人は、人々がもっと善良であつたら必要とはしないほどに、多くの苦しみをなめ努力をしなければならぬのである。第一に、義人の正しさに対する俗人の嫌悪と迫害に耐えなければならない。第二に、義人は、われわれが基準に達しえないために生じる損失を埋め合わせなければならない。われわれ愚かな罪人と、罪の必然的な破壊的な結果との間に介入し、超人的な模範（骨惜しみせず自己を役すること、人間の限度をこえた正義と純粋さを保つこと）によって、人間の生活と行動の理想を、人々が日常生活において陥っている墮落から救わなければならない。こうして、イエス・キリストは、まことに「富んでおられたのに、われらのために貧しくなり」（IIコリ

ト八九)、「われわれのとがのために傷つけられ」(イザヤ五三五)、「われわれのために苦しみをうけ」(一ペテロ二二二)、「多くの人の過ちを担い、背いた者のためにとりなしをした」(イザヤ五三一二)のである。こうしてキリストは、「きずや汚れのない小羊のように犠牲とされて、われわれの第二の性質となったむなし生活から、われわれを贖った」(一ペテロ一18-19)のである。こうして「罪を知らない方が、わたしたちのために罪とされた」(IIコリント五21)のである。聖パウロの全著作とペテロ前書に書かれているキリストの苦難の意味を正しく深く理解すれば、キリストの贖罪とはこういうものであったのである。(66-67)

したがって「怒れる神の怒りを満足させ宥める」という観念は、イエス・キリストの犠牲に関するパウロの見解には入ってこない。犠牲に関してパウロが第一に考えることは、それによってイエスが利己的な衝動の掟に死に、一般の人々にとって最も貴重で身近かなものを放棄したことである。第二は、イエスはこうすることに於いて苦しんだのだが、その苦しみは彼のためではなく、われわれの必要のためであった。彼の善のためではなく、われわれの善のためであった。第一の面においてイエスは martyrion、すなわちその生と死において義と、神の力と善の「証し」となる。第二の面において彼は anitlytron、すなわち「贖い」となる。(編者 R・H・スパーは、この二つのギリシア語が並べられているテモテ前書二章六節「キリストはすべての人の贖いとしてご自身を献げられたが、それは、定められた時になされた証しにはかならない」を引用する。原文では贖いと証しが仲保者イエス・キリストと同格である。贖いはアーノルドの第三の犠牲観、証しは第二の犠牲観に由来する。) いずれの側面からも、イエス・キリストの厳粛で苦痛にみちた罪の断罪が、彼を見つめるわれわれの上に罪がもっていた縛りと吸引力を弛め、われわれが善を知り、善を愛し、自己を超えて立ち、キリストと一体化し、罪に死ぬことを、たやすくさせるのである。(67)

アーノルドの議論はさらに、おおよそ次のように展開する。われわれのために為されたキリストの犠牲とそれによ

る罪の断罪は、永遠の秩序との和解へと途を開く。が、やがて一つの変化が訪れて、聖霊がわれわれを悔改めへと導き、われわれの内なる人は義を追い求め、キリストとの一体化を実現する。これは「キリストを着る」(ガラテヤ三27)と表現される。こうしてわれわれはキリストの死を繰返し、肉の掟に死に、肉のうちなる罪を断罪する、それがどんなに不完全であったにしても。しかし、これはキリストとともに命に、唯一の真の命によみがえることでもあるそれは「義と真の聖とをそなえて、神にかたどって造られた新しき人を着る」(エペソ四24)ことであり、われわれ自身ではとうてい従うことのできない道德的秩序の永遠の法則に従うことである。こうして、神はわれわれを義と認める。われわれは神の義と、それを得たという実感とをもつ。永遠の秩序が罪ぶかく犯されたのだから厳しく罰せられるであろうという重苦しい感じから解放され、神の意志と一体となり、宇宙的秩序と調和して働く喜びを感じる。こうして義とされるのみならず聖とされ、永遠の秩序と調和し神と和らぐのみならず、それらに献身し帰依する。この帰依からキリストによる神とのいやまず一致が生まれ、栄光から栄光へと進むことができる、とパウロはいう。(IIコリント三18)これがキリストの犠牲に関するパウロの考えのすべてである。(68)

III

ここで現代日本の、われわれと同世代のキリスト教研究者たちが、贖罪と復活をどういうふうに考えているかを見ることにしたい。八木誠一『イエス』(清水書院、一九六八)、田川建三『イエスという男』(三二書房、一九八〇)、高尾利数『イエスとは誰か』(日本放送出版協会、一九九六)という人たちとその業績である。そのうち最も新しい高尾氏の発言をとりあげたい。

「近代以降の歴史的・批判的研究をきちんと踏まえたならば、イエスの十字架上の血があらゆる時代のあらゆる人々の罪を贖うものであったとか、イエスが三日目に死人のうちから復活したというようなことが歴史的事実として生じたなどということをして、認めることはできない。

ユダヤ教徒のような牧畜を営んできた古代オリエント諸民族の間には、動物の血による罪の贖いという観念があり、実際、彼らの神殿において何世紀にもわたって繰返しそういう祭儀が行なわれてきた。そういう背景があればこそ、イエスの血による贖罪というような観念が比較的容易に受け入れられたのであろうが、われわれのような農耕民族、とりわけ稲作を中心とするような民族の伝統のなかでは、こういう観念はおどろおどろしいものと映り、簡単に受け入れられることはできないであろう。こういう観念は、単に古代的というだけでなく、地域的にも限定されているものと思わざるをえない。

また、死人のなかからの甦りという観念は、端的に古代的な世界像を前提にしたものであり、これを歴史的な事実とするなどということは、とりわけ現代人としては考えられない。イエスの時代でも、パリサイ派はもともと復活ということを信じていたが、サドカイ派は信じていなかった。同時代のグノーシス主義においても、復活を文字通りの意味で受けとる者は「愚か者」であるとさえ言われていた。死人からの復活という観念は古代的な世界像に基づいたものであり、当時でさえ普遍性など持っていなかった観念である。

そういう古代的世界像に基づく観念を実体的・史実的事実として主張し続けるようなことは、ほとんど迷信だといわれても仕方がないであろう。近代プロテスタントイズムに発する長い探求をまともに受けとめれば、「それを迷信とすることは」当然のことである。そういう認識は、あまりにも当たり前の話であって、史実的事実としては、そういうことなどありえないということをして、牧師であろうと神学者であろうと、正直かつ明確に承認すべきであると思う。

それは、あまりにも「大いなる無理」(滝沢克己)なのであり、そのことを素直に認めることは、自らの精神衛生のためにも健全なことで、まさにつまらないこだわりから解放されるようになるであらう。(24-26)

高尾氏の発言が先人の研究を踏まえたというからには、わが国においてもどのような研究があったかを見ることにしたい。このときより七〇年以上前、大正年間(一九二一-一九二六)の終り頃に、波多野精一は京都大学における講義において、その原稿を整理出版した『原始キリスト教』(岩波全書、一九五〇)によれば、「復活」を次のように述べている。

イエスの処刑後、一旦は落胆し、遁走し、離散した弟子たちが、わずか七週間後のペンテコステには再びエルサレムに集まり、神が彼らの師イエスを「立てて主となしキリストとなし」た(使徒行伝二36)と説きつつ熱心に勇敢にこの福音の宣伝を始めたのである。この激変を来たしたものが、**「イエス復活の信仰である。イエルサレムの有司に殺された師は甦り今生き居るといふ信念である。吾々が差当り確実なる事実として認識し得るは、信仰の発生に尽きてゐる。更に進んでその発生の場処、事情、成行等を問題とする時は、吾々の有する史料は著しき欠陥を示すのみか又極めて露骨なる矛盾にさへ陥つてゐる。……弟子達をしてうなだれた首を起し、希望に輝く眼をもって天のかなたを望むに至らしめた新しき体験を、福音書はイエスの死骸を収めた墓が空虚となったといふことによつて説明しよう」と試みてゐる。**しかるにこのことに関しても、その後の出来事に関しても、諸福音書相互の間に不一致を見るばかりか全体として考察する時は福音書の記事は更に復活の体験の最も古き且つ最も信すべき記録として見做さるべきパウロの書翰(コリント前一五・五以下)と相容れない。福音書のイエス復活の物語はむしろ復活の信仰そのものよりして、古代人の素朴なる世界観の地盤において、或はその信仰の帰結として或はそれを弁護しようとの努力によつて発

生した、宗教的想像の産物と見るべきであらう。……イエス生くとの確信は墓を抜け出た彼の肉体によって吹込まれたものではなかった。パウロは復活したイエスが先づペテロに現はれ、次に十二弟子に現はれ次に五百人以上の弟子達と同時に現はれたことを述べ……最後にダマスコへ向う途上のわが体験を掲げてゐる。……この体験は何等か幻覚やうのものを伴ひ又当時の世界観の要求した表象の形において行はれたに相違ないが、その真髓においてはそれ等を機縁として行はれた彼等自身の内的精神的復活であり、彼等の眞の自我の勝利であり、彼等の内的生活、彼等の心情に對するイエスの有した意義及び支配の回復であつた。」(135—138)

引用は長くなつたが、「教壇で語る先生の聲咳に接したことのある読者は、「本書の」到るところに先生の懐しい語調を親しく耳にする想ひを感じ」ずるといふ。(石原謙「本書の刊行について」、9—10) その波多野精一の肉声を私の散文で妨げることができなかったからである。

パウロのダマスコ体験が、「決して肉体のままなるイエスを肉眼をもつて見たことを意味しない」のは、彼がこの体験を言い表わすのに「神の御子をわが内に顕はす」(ガラテア一16) という言葉を用いていることによつても明らかである。「彼が終生信じ崇め、彼の新しき生の源として体験したキリストは肉体的とは全然類を異にする、天上の光に輝く、神的靈的なる存在を保つ實在であつた。」(155)

パウロが「内なる心眼」をもつてかかる超感覺的實在を見たダマスコ体験と弟子たちの体験とを同列に掲げていることは、弟子たちの復活体験も大体において同種類のものであつたことを推測させる。と同時に、これが福音書に描かれたあまりにも肉体的な復活の記事(たとえばルカ二四39—43)と全く一致しないことは、福音書の史料としての価値を批判する尺度を提供するものでもある。「復活」とは、パウロのいうとおり、「肉の体」で播かれ「靈の体」に甦えることであつた。(一コリント一五4) アーノルドがめざした spiritualisation はすでに聖書のなかでパウロ自身が始

められていることであった、いやまず「natural piety」をもって。

高尾利数氏から波多野精一までの時間をコンパスにとって更に過去に溯らせれば、優にアーノルドに達する。逆にいえば、アーノルドと現代との中点に波多野精一が来る。三者に共通な点は、近代科学の影響により荒唐無稽な神話から福音を「非神話化」させようとしていることである。

IV

Spiritualisation が垂直収斂もしくは普遍捨象化の方向をもつ動きであるとすれば、それと交差して水平拡大もしくは特殊具象化の方向をもつ動きがパウロのなかにもあった。アーノルドはそれを orientalisation (22) と呼んでいる。それはパウロの出身にかかわる事柄であるから、Hebraise (21) という語も用いている。イエスの「犠牲」という中心的観念をパウロは多様な比喩的言語で表現している。英訳聖書の表現にしたがえば、ransom (身の代金、イテモテニ6) / redemption (買戻し、ロマ三24、八23) / propitiation (なだめるもの、ロマ三25) 等がそれぞれ相互に異なるギリシア語に対応して訳し分けられているが〔邦訳ではすべて「あがない」と訳されている〕、そのほか blood という offering といひ、パウロの用語はそれ自身の美しさと相応わしさをもち、想像力にとんだ東洋の言語であるから、哲学の論理的言語に翻訳する必要はない。もし翻訳しなければならぬとしたら、すでに翻訳した「キリスト」ともに死ぬことによってキリストと一体化すること」というのが真の正しい翻訳になる、とアーノルドはいふ。(69)

このアーノルドの発言は、ヘブライ的具体的イメージが普遍的一般的概念に収斂されると同時に、そういう抽象的

概念が多様な具体的イメージに広がるものであることを示している。だが、それと同時に、ヘブライ的イメージが伝統的宗教的イメージで本来が垂直思考の産物であるから、それを一括して説明 (explain) する抽象的哲学的表現が水平化の働きをする逆転も生じている。ともあれこの両方の力が、それぞれ他方の力を強めあって、パウロの言葉の説得力を増すことになるのである。

なおアーノルドは、ここで一つの興味ぶかい事実を指摘する。ロマ書五章10—11節は、欽定訳では、

10 For if, when we were enemies, we were reconciled to God by the death of his Son: much more, being reconciled, we shall be saved by his life.

11 And not only so, but we also joy in God through our Lord Jesus Christ, by whom we have now received the atonement.

となっている。11節の atonement は10節の二つの reconciled と同じギリシア語の翻訳であるから訳し分ける必要はない。その後の英訳は 'reconciliation' となっている。独訳、仏訳をみても、三語に同じ訳語が当てられている。欽定訳にのみこのような違いが出てくるのは、当時の翻訳者たちの頭がその時代のカルヴァンの教義でいっぱい、その偏りから来る色づけを免れなかったのだ、とアーノルドは警告する。(20)

因みに atonement の語源は一二三〇年頃の atone (at one) からで、一五二三年トーマス・モアでは「和解、同調」を、一五二六年ティンダルでは「贖罪」を意味し、一六一一年の欽定訳へと受けつがれる。シェイクスピアでは *As You Like It* や *Coriolanus* に「合体する、合意する」の意味で用いられる。普遍的な世界宗教の最も重要な概念を表わす語が、中期英語に発する単語で、ドイツ語にもフランス語にもない、純粹に英語だけの語であるということ

は、なにか不思議にも思われ、かつ *at onement* を意味するならば、アーノルドの頻用する *identification* よりもむしろ慕わしい気がする。

ともあれ、パウロの詩的言語に対する詩人アーノルドの理解と共感はやがて「文学としての聖書」の提唱へ向かう。「西洋人」(21) は「心情の宗教を頭脳の理論にかえた。」(69) その合理的言説を超える啓示的内容を、彼は文学というものに期待した。比喩的言語をもって東洋的思考をする (*Orientalise*) パウロの研究にギリシア・ローマの学問的方法をもちこんで哲学化した (*Philosophise*)、才能はあるが危険な学者たちがいる。その筆頭がアウグスティヌスであった。彼が偉大な天才であったことを疑う者はいない。いや、偉大な宗教的天才であったが、形而上学と宗教の境界線を混同した。これはパウロが決してしなかったことであるが、この点において彼はパウロと異なり、パウロに劣った。アウグスティヌスは、パウロの東洋的な表現のなかに西洋的弁証法の形式的命題を見出すという先例を残した。

その系列の最後に、現在は次第に弛みつつあるが、まだわれわれはその束縛のなかにある、高圧的なプロテスタントのペリシテ人「カルヴァン」が来る。彼は真面目だが、感覚が粗大で、散文的である。人が神の義を着るというパウロの神秘的な観念のなかに、ただ厳密に法律的な取決めだけを見、彼の全想像力を「地獄」や「新しいエルサレム」に振り当てたのであった。こうして、いわゆるパウロの教義は人口に膾炙したものとなったが、真のパウロの思想は見失われ、埋没したままで、とアーノルドは嘆く。

それにひきかえ、「キリストとともに死ぬ」というパウロの観念を、どんなプロテスタントの論文よりも高唱して人の耳目を惹いたのは、『キリストに倣いて』の著者トマス・ア・ケンピスであった、と称える。

だが、私には、「わが罪赦されたり」という安心と歎びがなければキリストとともに死ぬということさえできないのではないか、神の側からも人間の側からもなんらかの形で、罪の決着がついた後でなければ、次のステップに踏み

出せないのではないか、そしてそれが十字架の意味であるように思われる。

ともあれ、アーノルドのこのアウグスティヌスとトマス・ア・ケンピスとの比較は一挙に彼自身の立場を明らかにする。アウグスティヌスは、キリストを人間の罪を贖う救い主と見なすのに対し、『キリストに倣いて』という表題は、キリストを人間があやかり模倣すべき模範・師表と見なしていることを示す。前者は、人間が完全に無力であるとの自覚が絶対他者への依存・信頼の前提であると主張するのに対し、後者は、キリストに倣う力が自己にありとする自負を前提としている。これはアウグスティヌスが戦ったペラギウスとの対立を連想させる。ペラギウスは謹厳な学識にとむイギリス人修道士であったという。ミルトンにもペラギウス主義の側面があったと指摘されるが、ミルトンといいアーノルドといい、ともに彼らの古い先輩と同じように、謹厳な学識にとむイギリス人であったことは決して偶然ではない。

さて、いよいよ本書の最後のページは、聖パウロの墓のあるサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂の Paolo Fuori le Mura, i. e. the Church of St. Paul Outside the Walls) に詣でたアーノルドの、個人的な回想をまじえて、あたかも散文詩のようなパウロへの賛辞^{パネゲジック}で終る。彼は一八六五年五月二八日、ヨーロッパ大陸における高等教育機関視察の途中でこの教会を訪ねた。一八三三年の火災で破壊されたが、一八五四年に修復が完成して十年ほど経った時期であった。

「この教会はローマ市街から一・二マイル離れ、オステティアとその廢墟に通じる街道に面している。今やその内部は、イタリアの教会の贅をつくした華麗さのすべてをたたえ、その天井には金文字で *Dioobis Certum* (「異邦人の博士」と書かれている。黄金はきらめき大理石は輝いている、が人ひとりそこにはいない。旅人は「ローマの烟と

富と騒がしさ」(ホラティウス)を遠く離れ、彼のまわりは静寂が領している。パウロはここに眠っている、代々にわたってこの世から隠されていたが、彼によってほぼ十年あまり陽の目をみたものの、再び彼とともにその墓のなかに埋められてしまった興義を、ひとり懐いて！ われわれの時代においても彼が甦ることはないであろう、彼は奇跡ではなく道徳的側面を見出そうと絶えず努力し、知性をして宗教的意識のあらゆる活動を追求し確保しようとする努力したにもかかわらず、だ。宗教に関心をもつものの、われわれの多くは黙示録の物質主義を求め、捕らえがたい宗教心を求める者は少ない。科学は、明瞭でないものなかにますます真実なものを見出すことをわれわれに教えるものであるが、次第に通俗の宗教の物質主義を克服することに役立つであろう。他方、捕らえがたい宗教心に心を寄せらる者も、神学、すなわち宗教的事実の科学的理解が、宗教のために必要とされることを経験によって教えられるであろう、ただし、その神学は真の神学であって誤った神学ではない。これら二つの作用「科学的知性と宗教心」がパウロの再出現をうながすであろう。パウロの教義は何世紀にもわたって埋められていた墓から甦るであろう。その教義は未来の教会を教化するであろう。それは、より幸せな世代の同意と、より迷信的ではない時代の拍手とを獲得するであろう。あらゆるものをもってしても、神の教会が、この「神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であって使徒と呼ばれる値うちのない者」(Iコリント一五九)と自ら称した人物に負う負債の半ばも払うことはできないであろう。」(71)

「黙示録の物質主義」が高価で華美な宝石をちりばめた豪華な天の都を含意するならば、東洋人の感覚から私はアーノルドに全面的に賛成するが、死者の復活、万物の復興、宇宙の完成というヴィジョンを指すならば、賛成の拍手を送ることはできない。「奇跡ではなく道徳的側面を見出そうと努力」したという評価も、アーノルドの視線が来世

にもかかわらず、現世の倫理的努力に局限されている証拠とすれば、本来の宗教の領域を狭めているように思われるのである。

注 本文中の括弧内のアラビア数字は、アーノルド散文全集の定本 *The Complete Prose Works of Matthew Arnold, VI. Dissent and Dogma*, ed. R. H. Super (Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1968) に収められた 'St. Paul and Protestantism' 中の該当するページである。参考文献の場合はその書物のページであり、聖書の場合は、ローマ数字は書簡の別、漢数字は章、アラビア数字は節をあらわす。また本文中の傍点は筆者が強調のため付したものであり、鍵括弧内は筆者による補注である。